

## 造園大賞の受賞

2005年に「文化的景観」が文化財類型に加わり、翌年の2006年に奈良文化財研究所に景観研究室が新設されました。筆者が採用されたのはその翌年の2007年、所内初の文化的景観の研究者として、でした。しかし、当時は文化的景観保護に関わる制度も概念も未熟で混乱のさなか。関わる皆が手さぐりの状態の中、藁にもすがるような思いで質問されるものの応えられず、苦しい状況が5年ほど続きました。このような手さぐりの状況を、「フィールドで調査する」「みなが議論する」「形にして伝える」という3つの方法を相互に関わらせながら進めることで、徐々にこの悶々とした状況を整理していくことができたと思います。

フィールドでの調査は、四万十川流域を皮切りに、宇治市、京都市、佐渡市、岐阜市等で実施してきています。こうした実践的研究と平行して2008年度から文化的景観研究集会を毎年開催し、2015年度からはシンポジウムとともにポスターセッションとエクスカッションもスタートさせました。文化的景観の学術や取組に関わるメンバーにとっての情報交換の場となりつつあります。ただし、文化的景観研究集会は公開型のシンポジウムのため踏み込んだ議論をすることがむずかしく、2012年度からは少数の固定メンバーで議論をおこなう「文化的景観学検討会」も立ち上げ、定期的に話し合いをおこなっています。

また、調査報告書やシンポジウムの報告書等を1年に1冊は刊行するようにしています。研究成果をひろく伝えるためですが、文字にすることで考えを整理するという側面もあります。2015年度からは「文化的景観スタディーズ」というシリーズ名をつけての刊行をスタートさせました。

こうした取組をおこなってきたことを受け、本年5月、「文化的景観の概念形成と制度運用の充実に資する貢献」として東京農業大学より造園大賞をいただきました。しかし、この栄誉はけっして筆者個人に対するものではなく、文化的景観に関わる調査研究をともにおこなってきた歴代景観研究室のメンバー、文化財や都市計画、地域づくり等のさまざまな立場の行政担当者、地域住民やコンサルタント等の方々との協働に対するものだと理解しています。

(文化遺産部 恵谷 浩子)